

氏名	山本 実穂
学位の種類	博士（健康科学）
学位記番号	甲第 48 号
学位授与年月日	令和 7 年 3 月 13 日
学位授与の条件	畿央大学 学位規程第 17 条第 1 項 該当
論文題目	Anorexia assessment using the Simplified Nutritional Appetite Questionnaire and its association with activities of daily living in patients with stroke (脳卒中患者における SNAQ を用いた食欲評価と日常生活活動との関連)
指導教員	教授 庄本 康治
論文審査委員	主査 教授 森岡 周 副査 教授 永澤 健 副査 教授 高取 克彦

学位論文の要旨

【背景】

食欲不振は、悪液質、サルコペニア、持久力の低下、歩行速度の低下、移動能力の低下と関連しており、栄養不良および体重減少を引き起こし、その結果、虚弱、障害および死亡のリスクを増大させる。高齢者の食欲評価として SNAQ が開発されており、SNAQ は、高齢者における食欲評価指標として十分な信頼性と妥当性が示されている。SNAQ は MNA では特定できない、将来の体重減少リスクが高い患者を特定する。脳卒中患者においても体重減少は予後不良であり、特に急性期で多く見られる。よって体重減少リスクのある脳卒中患者を特定するためにも食欲評価が活用できると考えるが、脳卒中における SNAQ を用いた食欲不振の妥当性やアウトカムとの関係性については報告されていない。

【目的】

本研究の目的は、急性期脳卒中における食欲不振評価としての SNAQ の妥当性を検証することである。さらに機能的転帰との関連について検討することで、脳卒中における食欲不振評価の有用性も検討する。

【方法】

本横断観察研究では、急性期脳卒中患者を対象に、急性期病院退院時に SNAQ を用いて食欲評価を行った。SNAQ は 4 項目（食欲、満腹感、食物の味、1 日の食事回数）で構成され、各項目 1-5 点の 5 段階における順序尺度からなる。4-20 点で構成され、点数が高い程食欲があることを示している。SNAQ スコアと各栄養評価指標及び骨格筋量、筋力、日常生活活動（FIM-M）との関係を検討した。また、SNAQ が機能的転帰との関係を検討するために、FIM-M を従属変数、SNAQ 及びその他の交絡因子を説明変数とした重回帰分析を行った。

【結果】

本研究で解析対象となった 234 名の脳卒中者において、患者年齢の中央値は 72 歳（IQR64-78）であり、70%が男性、病型は 84%が脳梗塞であった。急性期退院時点における SNAQ スコアの中央値は 15 点（IQR13-16）であった。SNAQ は体重変化率、FIM-M、MNA、MNA-SF、エネルギー摂取量、タンパク質摂取量と有意な相関を認めたが、BMI、筋量、筋力において有意な差は認められなかった。交絡因子を調整した重回帰分析では、SNAQ スコア（ $\beta = 0.106$, $p = 0.007$ ）は FIM-M と独立して関連していた（adjusted $R^2 = 0.662$ ）。

【結論】

急性期脳卒中患者における SNAQ スコアは各栄養指標と相関し、また機能的転帰と独立して関連していた。以上から、これまで食欲評価は栄養評価の一部として考えられていたが、ADL 能力と関連が認めれたことから、急性期脳卒中患者における SNAQ を用いた食欲不振の評価は有用と考えられる。